

# 北村謙次郎文学における 白系ロシア人イメージ —「苦杯」を中心に—

韓 玲玲

総合研究大学院大学 文化科学研究科 国際日本研究専攻

本論では、北村謙次郎の短篇小説「苦杯」を取り上げる。この作品は北村が1944年に執筆したもので、『満洲公論』に発表されると同時に、「酒頌」というタイトルで中国語に翻訳され、『芸文志』に掲載された。

北村は1904年、東京に生まれた。幼少時に家族と共に関東州の大連に渡ったが、大連中学校（のちの大連一中）卒業後、東京に戻り、青山学院、国学院大学に通いながら文学修業を開始した。井伏鱒二、太宰治などと付き合いながら、『文芸プランニング』、『作品』、『日本浪漫派』など多くの雑誌と関わり、日本文壇に確かな足跡を残した。1937年、北村は満洲国の首都・新京に渡った。そこで彼は雑誌『満洲浪漫』を創刊したり、長篇小説『春聯』を執筆したりして、満洲国唯一の職業作家となった。

「苦杯」は、北鉄讓渡の影響を受けた白系ロシア人の人間像を描いた物語である。葡萄酒醸造に専念したカズロフスキーは、北鉄讓渡によって商売が不調になり、自分の葡萄酒を愛飲してくれる友人イワンまで失った。しかし、彼は酒への信仰を貫き、妥協せずに憂鬱の日々を送っている。一方、北鉄讓渡によってソ連に帰国したイワンは7、8年の放浪生活の後、カズロフスキー宅に辿り着いたが、すでに酒を鑑賞する能力を失っていた。その再会の場面では、二人は、ただ葡萄酒を飲み続けているだけだった。

「苦杯」が創作された1944年当時、満洲国の文化統制によって、文学者はほとんど自由に創作ができなくなっていた。この小説を通して、北村は時代に対する憤懣を語っている。創作意欲があっても小説を書くことができない、その苦しさは直ちに中国人作家たちの共鳴を呼んだ。

それまでは対象に距離を置いた観察者の目で創作してきた北村は、この一篇をもって、従来の創作方法を突破した。執筆者という存在をうまく小説の中に溶け込ませ、社会から落ちぶれた白系ロシア人の心理を生き生きと表現することができた。とりわけ、一人の人物の心理動態に焦点を絞っているため、登場人物の人間性に対する観察と、それに対する深い洞察とが、この小説の大きな特質となっている。

キーワード：北村謙次郎、満洲文学、文化統制、植民地文学、北鉄讓渡、東清鉄道、白系ロシア人

はじめに

1. 北村文学における白系ロシア人

2. 「苦杯」

2.1 「苦杯」の内容紹介

2.2 「苦杯」の創作背景

2.3 「苦杯」の登場人物

3. 「苦杯」の社会的影響

3.1 北村の執筆動機

3.2 中国人作家の共鳴

終わりに

## はじめに

雑誌『満洲浪漫』を代表する作家北村謙次郎は、植民地文学研究の先駆者である尾崎秀樹によって、「おとなの童話とでもいうにふさわし浪漫的な肌理のこまかい作風をもつ」<sup>1)</sup>と指摘されたことがあった。この評言は、北村のすべての文学作品に共通するものとは言いきれない。本稿は、「苦杯」という小説を中心に、北村の小説創作における白系ロシア人イメージを検討しながら、北村文学の多面性を考察する。

北村謙次郎(1904-82)は、東京の生まれ。幼少時に家族と共に関東州の大連に渡ったが、その時の経験は彼に満洲の作家になる道を開いた。その北村は、大連中学校(のちの大連一中)卒業後、東京に戻り、青山学院、国学院大学に通いながら文学修業を開始した。井伏鱒二、太宰治などと付き合いながら、『文芸プランニング』、『作品』、『日本浪漫派』など多くの雑誌と関わり、日本文壇に確かな足跡を残した。1937年、満洲国の首都・新京に渡った。そこで彼は雑誌『満洲浪漫』を創刊したり、長篇小説『春聯』を執筆したりして、満洲国の日本語文学を代表する作家となった。

北村は多くの作品を書き残したが、その中で中国人によって翻訳されたのは3篇しかない。それは随筆「半生之記」<sup>2)</sup>、評論「由「平沙」談到「作家訪日」」<sup>3)</sup>、と短篇小説「酒頌」<sup>4)</sup>である。このうち前者の2篇は、原文の日本語作品の初出を確認できず、その原題も不明である。後者の「酒頌」は原題を「苦杯」といい、1944年に発表されたものである<sup>5)</sup>。この作品は日本語で発表さ

れると同時に、「酒頌」というタイトルで翻訳され、中国語雑誌『芸文志』に掲載された。つまり、原作とその翻訳とが同時に活字になったのである。言い換えれば、「苦杯」は発表される前の段階で、すでに中国人作家や雑誌編集者に注目されていたのである。では、「苦杯」とはどのような小説なのか、そこから北村文学のいかなる特徴を見えるのか、その点をこれから検討していく。

## 1. 北村文学における白系ロシア人

北村が白系ロシア人を自らの創作に取り入れるようになったのは、彼らの生活環境に対する好奇心に由来すると考えられる。1912年、家族と共に大連に渡って以来、北村の生活環境は絶えずロシア的雰囲気から離れなかった。たとえば、最初に転校した小学校は、日本橋小学校である。その学校は、大連のロシア市政時代の政庁街の近くにあったため、幼い頃の彼はロシア風の建物を見ながら成長したのだった。そして、中学時代、北村は友人と一緒にハルビンに旅行した。その途次、彼は初めて新京郊外のロシア人町・寛城子のことを知り、興味を抱いたものの、スケジュールの都合で足を運ぶことができなかった。しかし、その後のハルビン滞在は、北村にロシア人を観察する機会を与えた。そのことについては、北村の随筆「独身宿舎」に記されている。ここでは、主としてハルビンの日本人の生活が描かれているが、その最後に、「女一人を中にした二人の男、みんなロシア人、めいめい肩を組合つて静かな足どりで今私たちのや

つて来た沼の方へ歩いて行く」<sup>6)</sup>といった描写がある。ロシア人たちの様子を外部の視線から観察したものである。彼らに対する淡い好奇心を、洗練された筆致でスケッチしている。

1923年、北村は大連を離れ、東京で暮らすことになった。彼の関心は完全に東京のモダニズム文化に移り、白系ロシア人については「独身宿舎」一篇のほか何も書いていない。そして1937年、北村は満洲国の新京に渡った。翌年、寛城子に住むようになった。その時、白系ロシア人が再び彼の視野に入るようになった。

1938年、北村は『満洲行政』に「群盲」という中篇小説を発表した。現在、連載4回分のうち後半の2回分しか読むことができないため、小説の全体像は判明しない。しかし、この2回分から、作品の主人公は、白系ロシア人科学者の娘と結ばれた中国人男性の程という人物であることが分かる。程は映画製作の仕事をしていたが、「悟空西へ行く」という映画の製作中に失明してしまった。敏感な彼は、両親の言いなりに振る舞う妻に従っていかなければ、今後の人生を自由に送ることが出来ないと悟り、絶望の淵に立たされる。そのような時、妻のお腹にいる胎児が「人体実験」の材料になると告げられ、その事実を苦しむ。そして、「悟空西へ行く」の試写会が行われた日に、彼は一人で死の道を選んだ。その事実と直面し、大きなショックを受けた妻は意識不明のまま出産し、彼女が目覚めた時には、その生まれた赤ん坊はもう実験台に送られていた。小説の最後に、生まれて20日後の赤ん坊が、実験によって20歳にまで成長している様子が描かれ、父親と同じように、人生に寂寥を感じる悲哀の人になったことが付け加えられている<sup>7)</sup>。この小説は、自殺した程の心理的な動き(寂寥感)を描いているが、作家自らの考えを主人公に押しつけた印象が窺える。一方、北村は白系ロシア人の「黒いバラの展覧会」や「人体実験の発明」といったところに着眼し、白系ロシア人の生活ぶりを表に出している。つまり、この一篇にお

いて、北村は外部からの観察を通して、ロシア人の生活様子を描いたものの、作中の登場人物の心理の面までには迫っていなかった。

1940年に発表された「十六号の娘」<sup>8)</sup>は、前述の「独身宿舎」と同じ素材であるが、日本人の遊び相手であったロシア人少女の生き方は、旅行中の日本人少年の目を通して描かれている。

1941年、北村は長篇小説「春聯」を『満洲日日新聞』に連載し始めた。その小説の舞台は北村が当時、居住していた寛城子(新京の北郊)である。そこは昔の東清鉄道の駅の附属地として、街の様子や人々の生活ぶりなど、全てがロシア文化に染められていた。そのような環境で暮らしている北村は、この長篇に、新京の白系ロシア人の生活像を写し出した。そこには、天使のようなロシア人の子供の存在がある一方、惨めな金銭主義者のロシア人の大人の姿も現れる。そして、この小説の中で最も重要な役割を果たすのは、ナターシャという名の若いロシア人女性である。満洲の大地に深く結びついた存在として描かれてはいるが、彼女の行動からは、あくまでも幻想めいたイメージを覚える。この小説では、観察の対象となった白系ロシア人は様々な姿が描写されているが、中でもナターシャの存在は、理想化されてしまい、通常のロシア人に対する描写というより、むしろ北村によって作られたと見た方が適切だといえよう。作中、白系ロシア人の満洲に定着する生活ぶりを讃え、在満日本人の落ち着かない生活態度を批判しているが、白系ロシア人については客観的な観察も心理的な描写もあり、物語としての一貫性も整っているため、それまで書かれた「群盲」や「十六号の娘」と比べると、完成度においてかなり優れている。もし1944年の「苦杯」がなければ、「春聯」は北村の描いた白系ロシア人の作品の中で最も優れたものとなっていたかもしれない。

## 2. 「苦杯」

### 2.1 「苦杯」の内容紹介

「苦杯」は、「北鉄譲渡」を経験した、ある白系ロシア老人の追憶を中心に描いた物語である。舞台は満洲東部のポグラニーチナヤ（綏芬河）である。主人公カズロフスキーは若い頃、北満鉄道（東清鉄道）の開通に伴い、北満に渡ってきた。そこで、彼は北鉄（北満鉄道）の長官の知遇を得て葡萄酒を醸造するようになり、30年間の努力の末、ようやく純正な葡萄酒を作ることができるようになった。

時期は1935年の北鉄譲渡の頃であった。老境に近いカズロフスキーは複雑な心境でその日を迎えた。その後、彼の生活は一変した。北鉄譲渡によって帰国せざるを得ないロシア人が多く、カズロフスキーの友人イワンもその中に加わっている。イワンは、カズロフスキーの葡萄酒を販売する窓口であり、彼の葡萄酒の味をよく知っている鑑賞家でもあった。そのような親友を失い、カズロフスキーはますます寂しくなった。彼は引揚げロシア人の消息記事を掲載した古い新聞を眺めて、イワンへの思いを偲ぶしかない。

やがて、戦争が拡大し、ワインも統制されるようになり、カズロフスキーの葡萄酒も闇商売でないと販売できなくなる。しかし、カズロフスキーは闇商売を「酒の神様への冒瀆」と考えているため、自分は闇商売に関わることがなかった。そのような彼は、常に葡萄酒の販売のことを心配しつつ、北鉄時代の思い出に浸るだけ日々を送っている。

そんなある日、7、8年前に別れたイワンがカズロフスキー宅を訪れる。再会の喜びは何よりだが、イワンはすでに酒によって身体を冒され、カズロフスキーの葡萄酒の味を鑑賞できなくなっていた。悲しみの中、二人はイワンの「飲みさへすりや、そして酔ひさへすりや——それが当世向きなんだよ」<sup>9)</sup> という呟きの中で飲み続ける。

### 2.2 「苦杯」の創作背景

「苦杯」の創作背景となっているのは、「北満鉄道」という歴史的存在である。それについては、作中、カズロフスキーの若いころの思い出として語られている。

当時東清鉄道と呼ばれた北鉄の全線がようやく開通したばかりのころであつた。全通したといつても、ハルビンからポグラニーチナヤに向ふ東部線のうち、太平嶺、高嶺子あたりの山嶽地帯はスキツチ・パツク様式の假線、更にポグラニーチナヤから東方のグロデコウオにいたる山嶽線も假線といふ状態で、おまけに三露里ほどの間は徒歩連絡しなければならぬほどの頼りない開通ぶりだつたのだが、それでもとにかく、その年の十月末には本国のウイツテ蔵相から電報があり、全線開通を皇帝が嘉納あらせられた旨、鉄道建設の関係者に公表するまでにはなつてゐた<sup>10)</sup>。

やや長い引用となったが、作者は、「北満鉄道」開設の由来には触れず、初期の路線の模様から話を進め、この鉄道の背後に隠された「侵略」の事実を避けている。実際には、この鉄道は、「一八九六年すなわち日清戦争直後李鴻章、ロバノフ密約（露支攻守同盟）の第四条によって露国はシベリア鉄道延長線の支那領土敷設権を獲得し、一九〇二年には満洲里－ポグラニーチナヤ間、ハルビン－大連－旅順間その他支線を加えて延長約二五七〇キロに列車を通じなお森林、鉱山、附属地その他沿線にあらゆる利権を付随せしめて満洲経営の野望を着着実現した」<sup>11)</sup> という、ロシアの中国侵略の象徴的存在であつた。

また、戦後の刊行物『満洲国史』には、「北満鉄道の沿革は、すなわちロシア帝政時代以来の東方侵略の根幹を意味するものである（中略）この鉄道の敷設によって、満洲の死命を制するに至った」<sup>12)</sup> と、北満鉄道の実質的な意義が説明されている。それと同時に、北満鉄道が、日

本の満洲支配にとっても極めて重要な存在であったことを明らかにしている。

とりわけ、ロシア革命の後、北鉄を奪取しようとする日本の動きに対して、ソ連は共産党幹部を北満に派遣したりして、両者の衝突が激化した。また、中国側でも北鉄の回収をめぐるソ連と紛争したことがある。満洲国成立後の1933年、満鉄と満洲国有鉄の包囲に耐えられなくなったソ連は、北鉄の譲渡を日本に提議した。1年10カ月かかった交渉の後、日ソ両国は、北鉄の満洲国への移譲を調印するに至る。

交渉の成立によってソ連は満洲から撤退することになるが、日本側にとって、「北鉄接収の政治的意義として最も重大なことは、ソ連邦が多年にわたり北鉄を基点として遂行してきた、いわゆる対満赤化工作により、北満の治安並びに経済建設が阻害されていた癌を一応取り除くことができたこと」<sup>13)</sup>である。

上述のように、北満鉄道は、近代東アジアにおけるロシア、日本、中国の間の政治的葛藤のシンボルであったわけである。そして、「北鉄譲渡」はこの三国紛争の幕を一応閉じさせることになった歴史的な事件であった。「苦杯」とは、まさにその一幕を背景とする一篇なのである。

### 2.3 「苦杯」の登場人物

小説「苦杯」には、正面から登場する人物は、カズロフスキーとイワンの二人しかいない。カズロフスキーは本篇の主人公で、若い時はハルビンの貿易商で働いていたが、北満鉄道の初代長官の知遇を得てポグラニーチナヤに移住し、葡萄酒製造業を始めることになった。彼は毎年、長官の機嫌を伺い、奨励金を貰っている。このように、30年かかってようやく彼は、純正な葡萄酒を醸造することができるようになった。つまり、カズロフスキーは北満鉄道長官の知遇がなければ、事業に成功することができなかった。さらに、北満鉄道の存在は、カズロフスキーの事業展開に繋がるものでもあった。そのような

彼の、北鉄譲渡の日を迎えた時の心情は以下のようなものであった。

北鉄譲渡の記念行事を見守るカズロフスキーの胸中には、新しい夜明けのよろこびとともに一種言ひやうのない悲傷の思ひが渦巻いて、われながら矛盾し複雑した感情をもてあます気持であつた<sup>14)</sup>。

ここに述べられているカズロフスキーの「よろこび」とは、故郷を失った白系ロシア人の満洲国に対する期待であるように読み取れる。ロシアと日本の狭間に立たされたカズロフスキーにとって、北鉄譲渡とは、それまでの「エミグランド」(移民)としての身分から離され、満洲国国民の資格を付与されることになった大きな事件であった。それにより、母国を失っていた彼が新たに満洲国に対する帰属意識を持ち、その記念行事を期待している様子がこの部分から窺いしれる。その心理的な動きは、北鉄接収時の関東軍の方針と微妙に照合している。

宣伝の趣旨は、買収交渉の成立を以て日満蘇間に於ける協調精神の発露に帰著せしめ、互いに「心地能く」鉄道を接受すへきことを高唱し、交渉成立とともに直に平和を招来するが如き観念を抑圧す。又徒に日満側の勝利なる如く宣伝し、為に日満人就中白系露人に勝利気分を醸成し、蘇聯人を不安敵愾の情を誘発せしむるが如きは厳に之を戒む<sup>15)</sup>。

カズロフスキーの、満洲国に対する「夜明け」というような期待は、上記引用に見られる、まさに関東軍が否定する「勝利気分」そのものであったのだろう。作中、北村は、北満鉄道接収の政策面については語る事がなく、ただ、接収後の満洲国の経済情勢を「東洋の戦火が全世界に拡まつて商売は上つたりになる、税金は上る、統制は強化されるといふだんどりになつて

くと、昔風な商売しか知らぬ爺さんなどはさつそく悲鳴をあげ、どうにもならぬ絶望の淵へ引摺りこまれるやうな暗澹とした気分になりこんでしまった」<sup>16)</sup>と記すに留まっている。

それは言うまでもなく、カズロフスキーの「言ひやうのない悲傷の思ひ」の理由の一つである。30年かかってやっと完成した葡萄酒は時代の動きによって売れなくなった。つまり、せっかく醸造した葡萄酒を飲んでくれる人がいなくなったのである。それは葡萄酒醸造家にとっては何より寂しいことであろう。

実は、商売を維持していくには、統制品になった葡萄酒を闇取引で流通させればよい。しかし、その手を知っているカズロフスキーは、「闇で売って利を取めるといふやうな方法は、酒の神様への大へんな冒瀆であるとしか考へられなかつた。酒はあくまで実力だ——爺さんは真剣にさう考へ込んでゐる。ぺてんだとかいかさまだとかは、金輪際立入ることを許さぬ神聖な境地に住めばこそ初めて芳醇な酒も得られ、また安心して客に酒を勧めることも出来る。でないなら、酒造りや酒の売手ぐらゐ恐ろしい商売は世の中にないだらう。でなくても、酒は人を酔はせ、ともすると大きな罪禍の基になることが少なくないのだ。これを救ふのはあくまで真正直で真剣な酒造者の良心と、客に喜んで貰ふことを唯一の願ひとする販売人の謙譲でまつたうな心掛け以外にあるものではない」<sup>17)</sup>という持論を持ち、葡萄酒作りに対する信念を述べている。また、ほかの葡萄酒製造家が闇商売でやり取りしたと聞いた時に、「他人に儲けを占められるといふ焦躁より先に、酒造業者の良心の無さを憤り嘆く心が切だつた」<sup>18)</sup>と、葡萄酒製造家としての良心を語っている。

ここでは、カズロフスキーが抱く酒に対する愛着心が描かれている。まず、彼は闇商売が「酒の神様への冒瀆」だと考え、酒の神聖さを強調した。さらに「酒は実力だ」と主張して、酒に対する尊敬心を持たなければ、芳醇な酒を得る

ことも、また売ることもできないとする持論を展開している。それを逆に解釈すると、酒は人を酔わせるものだから、罪禍の基になる可能性が高い。それゆえ、それらの人を罪禍から救い出すには、醸造業者の良心しかないという強い意志を示していることになる。このように、作者はカズロフスキーの酒に対する信念を描くことによって、初めて、良心的な葡萄酒醸造家という彼の人間像を描きあげた。

一方、小説では、カズロフスキーという、時代の中でしっかり生きる人物をコントラストの対象に立て、イワンの姿を如実に描いている。ここで興味深いのは、小説でのカズロフスキーは殆ど客室の椅子に腰掛けており、沈思に沈思を重ねるイメージが濃厚であるという点である。それは読者に、ただ時間だけが流れていくという静態的な歳月感を与える。一方、イワンの小説での初登場は、カズロフスキーとの口喧嘩の場面からである。彼はカズロフスキーが葡萄酒のことしか知らないと言い、自分には思想があると主張する。いわばイワンは、「静態」のカズロフスキーと対照をなす「動態」の人物だろう。

このイワンは、「根からの赤系ではなく、いはゞ生活上の必要から表向きだけ赤くなつた赤大根組と称せられる一派であつたが、いざとなると鉄道をやめて新しい職を探すほどの勇氣も出なかつたらしく、多くの仲間と一緒に思ひきつて本国へ引上げて行つた」<sup>19)</sup>という人物である。赤系ではないのに「生活上の必要から表向きだけ赤くなつた」という一言は、時勢に媚びるイワンの姿勢を示している。

実際には、1935年3月に満洲国に売却された北満鉄道の元社員に対して、接収を指揮した関東軍は、以下のような方針を貫いた。

1. 蘇国「ソ連」側従業員は全部之を罷免し、買収協定の定むる所に従ひ国外に退去せしむ。
2. 満洲国側従業員は現状の儘とし人心の動揺

を来さしめざるを主義とす。

3. 前二号に依る不足人員は日人「日本人」、満人「中国人」及厳選せる白系露人「白系ロシア人」（一号罷免者中、蘇国籍を離脱せる者を含む）より之を補充す。日本人は本鉄道の国防的重要性に鑑み、全従事員の二割を補充するを目処とす。
4. 日満人の補充は主として国鉄及満鉄の人員を以てす。
5. 路警「警察官」は現在の国鉄路警と一律に処理し、厳選せる白系露人をも採用す。<sup>20)</sup>

この方針の第3条に従うならば、イワンはソ連国籍を離脱すれば、そのまま北満鉄道に残ることができたはずである。または北鉄を辞めて、満洲で新しい職を探すこともできたはずである。しかし、彼は、そのどちらの道もえらばなかった。イワンは生活に対する臆病者であったことが分かる。そのような彼は、ソ連に引揚げる仲間たちと一緒にいることにより安心を得るという道を選んだ。商売が出来なくなったとしても酒に対する信仰を曲げないカズロフスキーと全く正反面の人物である。

小説では、カズロフスキーは、ソ連に引揚げたイワンのその後を心配し、ポグラニーチナヤで配布されている『ナ・グラニツツエ』という週刊誌から彼の消息を推測しようとした。この週刊誌は、1936年、ポグラニーチナヤで創刊された<sup>21)</sup>。同誌には、ソ連に引揚げた元北鉄社員の話や、彼らからポグラニーチナヤに住む近親者へ宛てた手紙の類などが掲載されていた。それによると、引揚げ者らは途中で所持品を全部没収されたため発狂する者や自殺する者、行方不明になったりする者もあった。また、ソ連に帰った人たちは物質不足による、生活苦に追い込まれた。ポグラニーチナヤは、ソ連領とは河一つ隔てた土地に位置しているため、ソ連の情報を集めることが比較的容易であったのだろう。この雑誌について、『満洲年鑑』には出版許

可を得た日付が記録されているが、どのような内容であったのかは、北村謙次郎のこの小説によって初めて明らかにされている。

そのような背景から、イワンがいかに厳しい境遇に立たされていたかを推測することができよう。北村はイワンの引揚げ体験について真正面から描いていないものの、側面的な補足資料を十分提供している。つまり、イワン自身が語らないことについては、他の人の言葉や行動を借りて伝えることによって、読者の想像力を一層刺激する効果をもたらしている。と同時に、北満鉄道譲渡という事件が白系ロシア人にもたらした精神的な変貌も生き生きと表現することができた。

7、8年の放浪生活の後、イワンはカズロフスキーの家に辿り着く。その時の彼は「鬚ぼうぼうの、よれよれの服をまとつた」姿であり、カズロフスキーも一見、それが誰だか分からなかった。そのイワンはカズロフスキーの「おまへ、いつたい今まで、どこにどうして暮してたんだ」という問いに対して、「話すよ。話しきれないくらい、いろいろなことがあつたんだ。だが、俺には何ももうなくなつてしまった。話だつて、もう失くしちやつたのだ」<sup>22)</sup>と呟く。そして、かつてカズロフスキーの葡萄酒を陶然として飲んだ時の面影もなく、下卑な笑い声で「飲みさへすりや、そして酔ひさへすりや——それが当世向きなんだよ」<sup>23)</sup>としか言うことができなかった。

このように、北村は、北鉄譲渡という事件と、その後の時勢に潰されていった人間像を描き出しているのである。同じく北満鉄道の建設に満洲に移住してきた二人のロシア人であるが、それぞれ異なった道を歩んでいった。一人は葡萄酒造り一筋に専念し、ようやく成功したが、満洲国の経済統制に遭遇して、せっかく作った葡萄酒が売れない羽目となり、憂鬱の日々を送るしかない。一方、もう一人は葡萄酒の鑑賞家で、自ら「思想がある」と自慢する人物である。彼

は時勢に乗り越えようと考え、同僚と共にソ連に帰ったが、結局、7、8年ぶりに落ちこぼれた姿で友人の前に現れる。その時の彼は、葡萄酒を鑑賞するところか、酒に酔って生きることしか方途がない。つまり、地道の努力家でも近道を選ぼうとする人でも、時代、具体的に言えば、「北鉄譲渡」に翻弄された存在なのである。全篇には、時代に対する無力感に由来する、カズロフスキーの葡萄酒に対する悲しい感傷が流れている。

### 3. 「苦杯」の社会的影響

#### 3.1 北村の執筆動機

すでに述べたように、「苦杯」は1944年2月に発表された。では、北村はここで、なぜ1935年の北鉄譲渡を取り上げることにしたのだろうか。それは当時の満洲国の文学状況を離れては理解できない。

1944年の満洲国は、すでに2年前に始まった太平洋戦争に参戦し、日本の総力戦に巻き込まれていた。文芸上から見ると、1941年3月、満洲国弘報処によって発表された「文芸指導要綱」には、「国の産業経済の発展に比べ芸文活動の立遅れを指摘し、政府が積極的に乗り出してこれを指導育成せんとするもので、満洲芸文家をして安んじてその道に専念させ、芸文国策に協力せしめる意図をもって各専門家協会の設立を慫慂した」<sup>24)</sup>と述べられ、作家たちの文筆活動を国策と固く結びつけようとしていた。文芸・文化統制はすでにスタートしていた。北村謙次郎のみならず、満洲の多くの作家たちは鉱工増産現場、開拓団、勤労奉公隊または関東軍部隊などの現地視察に派遣され、報道文学を書かざるをえなくなっていた。とりわけ1944年ごろ、満洲国の文芸統制はすでに頂点に到り、満洲の作家としては、政府の指導に従わなければ、創作ができなくなっていた。

このような状況は、カズロフスキーの葡萄酒の醸造に類似している。30年間をかけてようや

く出来た葡萄酒は、自らの良心に背く闇商売でなければ売ることができない。それは、酒に信仰を捧げるカズロフスキーにとって何よりの苦痛である。これと同様の苦痛を、北村謙次郎も感じていたと思われる。1944年の北村は、短篇小説シリーズ「或る環境」、長篇小説「春聯」、短篇小説「砧」など、満洲の日本語文学史に記憶される力作、佳作を次々と発表し、生涯における創作活動のピークを迎えていた。にもかかわらず、満洲国は、すでに自由に創作ができない環境と化していた。創作の意欲と技倆は備わっているものの、小説を書くことが許されない時代に遭遇したのは、北村の不遇としかいえない。その口から出せない悲鳴は、「苦杯」のカズロフスキーという人物を通して巧みに描き出された。その苦しさは直ちに満洲国の中国人作家たちにも共鳴を及ぼした。

#### 3.2 中国人作家の共鳴

北村謙次郎の境遇と比べ、満洲国の中国人作家の状況はもっと深刻である。古丁、爵青、小松、疑遅などをはじめ多くの中国人作家たちは、1932年の満洲事変以降、祖国を失い、自分の作品や意見を自由に発表できない苦しみにあえていた。それにもかかわらず、満洲国の日本人の文学活動に対抗するため、彼らは苦痛を忍んで創作に励んでいた。

その彼らが作った中国語文芸雑誌に『芸文志』というのがある。1939年から40年にかけてと、1943年から44年にわたってと、前後2回刊行された、満洲国を代表する文芸雑誌である。同誌には、満洲国の日本人たちの作品が中国語に翻訳して掲載されている。管見に及ぶ限り、小説は北村の「苦杯」や長谷川濬<sup>25)</sup>の「大同大街」、竹内正一<sup>26)</sup>の「馬家溝」などが挙げられるくらいで、極めて少ない。

本篇に取り上げている「苦杯」は、「鬼才」と呼ばれた爵青によって翻訳されたものである。中には、爵青が翻訳を通して自らの見解を入れ

た箇所もある。たとえば、小説のタイトル「苦杯」という言葉は、翻訳せずにタイトルとして使うことができるにもかかわらず、「酒頌」と訳された。もともと、「苦杯」という言葉は、辛い経験をいう譬えとして、時代に翻弄された人生に対する苦しみが表示されていると考えられる。しかし、爵青の「酒頌」という言葉は、カズロフスキーの酒神に対する信仰を本篇の中心として押さえ、「酒の神に捧げる褒め歌」というふうに解釈している。つまり、北村の時代に翻弄される無力感の訴えに対して、爵青は、時代に翻弄されながらも信仰を貫く生き方が、この小説の中心だと理解していたと考えられる。

### 終わりに

「苦杯」は北鉄譲渡の影響をこうむった白系ロシア人の人間像を描いた物語である。この小説で北村は、1944年という、自由に創作できない時代に対する憤懣を伝え、それは満洲の中国人作家たちからの共感を得た。

それまでは対象に距離を置いた観察者の目で創作してきた北村は、この一篇をもって、従来の創作方法を突破し、執筆者という存在を小説の中に巧みに溶け込ませ、社会から落ちぶれた白系ロシア人の心理を生き生きと表現することができた。同じく白系ロシア人を描く竹内正一の創作と比べ、北村の「苦杯」は登場人物が少なく、筋立てもシンプルである。また、竹内の広い視野のもとに展開される白系ロシア人の群像に比べ、北村の方は、一人の人物の心理動態に焦点を当てているため、登場人物の人間性に対する観察と、それに対する深い洞察がその文学の大きな特質となっている。そのリアリズム的な描写は、従来の「浪漫的」な作風とは異なり、北村文学の多面性を見せるものとなった。

また、満洲国の日本人たちの作品が現地の中国人によって自発的に翻訳された事例は、そう多くない。その意味では「苦杯」は、満洲の日本語文学の歴史の中に特筆されるべき一篇であ

ろう。

ところで、1944年に書かれたロシア人の引揚げの場面は、翌年の1945年に繰り返された。ただし今回の主役は満洲から引揚げる日本人たちであった。北村はいかなる思いで、この小説を書いたのだろうか。「引揚げ」という事態が、自分たちの身に降りかかってこようとは、予想だにできなかったに違いない。戦後の日本人の満洲からの引揚げという、世界史上における最大規模の人口移動について、北村は沈黙を守った。ただ、戦後の長篇随筆『北辺慕情記』には、「満州芸文は独り絵画図書などにとどまらず、国家壊滅と同時に平家没落の如く土崩瓦壊した。それでよかつたのである」<sup>27)</sup>と書いている。

1950年、北村は、戦争末期に新京で活動していた日本人男性と白系ロシア人の女性との間に生まれた少女を主人公に、彼女の日本引揚げ後の生活を描いた長篇小説『ソルバージの歌』<sup>28)</sup>を書いた。また、彼の次男から、「親父が酔っぱらった時に、ロシア語を呟いたことがある」という証言も得ている。しかし、北村が戦後、一体どこまでの関心を白系ロシア人に抱いていたのかについては、この一篇の長篇小説から十分に省察することができない。

### 注

- 1) 尾崎秀樹『旧植民地文学の研究』、勁草書房、1971年6月30日、128頁。
- 2) 北村謙次郎「半生之記」、『芸文志』第3輯、共鳴訳、1940年6月15日。
- 3) 北村謙次郎「由『平沙』談到『作家訪日』」、『華文大阪毎日』第5巻第10期、駱駝生訳、1940年11月15日。
- 4) 北村謙次郎「酒頌」、『芸文志』第1巻第4号、爵青訳、1944年2月1日。
- 5) 北村謙次郎「苦杯」、『満洲公論』第3巻第2号、1944年2月1日。
- 6) 北村謙次郎「独身宿舎」、『文芸プランニング』第7号、1931年7月1日、29頁。
- 7) 本篇前半の2回分を読むことができないので、その「人体実験」がどういうものであったのか、論者にはよく理解できない。

- 8) 北村謙次郎「十六号の娘」、『新天地』第20巻第7号、1940年7月1日。
- 9) 注5、143頁。
- 10) 注5、134-135頁。
- 11) 「北鉄譲渡仮調印 東亜の禍根除かる 交渉開始以来一年十ヶ月目」、『大阪毎日新聞』1935年3月12日。
- 12) 満洲国史編纂刊行会編『満洲国史 総論』、満蒙同胞援護会、1970年6月30日、449頁。
- 13) 同上、458頁。
- 14) 注5、136頁。
- 15) 「北満鉄道接収要綱」、『八田嘉明関係文書』、R9-0401（(国立国会図書館憲政資料室)。麻田雅文『中東鉄道経営史』（名古屋大学出版会、2012年5月）79頁より再引用。
- 16) 注5、139-140頁。
- 17) 注5、140頁。
- 18) 注5、140頁。
- 19) 注5、136頁。
- 20) 『八田嘉明関係文書』、R9-0401、(国立国会図書館憲政資料室)。麻田雅文『中東鉄道経営史』（名古屋大学出版会、2012年5月）131頁より再引用。
- 21) 『満洲年鑑（昭和十六年、康德八年版）』、満洲日日新聞社大連支社、1940年12月5日、448頁。
- 22) 注5、142頁。
- 23) 注5、143頁。
- 24) 満洲国史編纂委員会編『満洲国史 各論』、満蒙同胞援護会、1971年1月30日、1140頁。
- 25) 長谷川濬（1906-73）、作家、詩人、ロシア文学研究者、『満洲浪曼』の同人。大陸的ロマンチズムの作風を特徴とする。
- 26) 竹内正一（1902-74）、早稲田大学仏文科を卒業。『作文』同人。代表作は短篇集『氷花』（作文発行所、1938年）、長篇小説『哈爾賓入城』（赤塚書房、1942年）など。ハルビンの落ちこぼれた白系ロシア人の生態をテーマとした作品を得意とした。
- 27) 北村謙次郎『北辺慕情記』、大学書房、1960年9月1日、248頁。
- 28) 北村謙次郎『ソルベージの歌』、偕成社、1950年2月28日。

# The Image of White Russians in Kitamura Kenjirō's "Kuhai"

HAN Ling Ling

SOKENDAI (The Graduate University for Advanced Studies),  
School of Cultural and Social Studies,  
Department of Japanese Studies

This paper discusses a short novel by Kitamura Kenjirō entitled "Kuhai" written in the year 1944. It was published in *Manchu kōron* and simultaneously in a Chinese translated version with the title "Jiu Song" and featured in a Chinese-language journal called *Yi wen zhi*, attesting the fact that by the time "Kuhai" appeared, it had already drew attention from the Chinese literary world.

Kitamura was born in the year 1904 in Tokyo. When he was a child he moved with his family to Dalian in Kwantung. Soon after completing middle school, he returned to Tokyo, where he started his literary activities while he was still a student at Aoyama Gakuin and later at Kokugakuin University. Together with literary figures like Ibuse Masuji and Dazai Osamu, he got involved with several literary journals such as *Bungeipuraningu*, *Sakuhin*, and *Nihon roman-ha*, and established himself in the field of Japanese literature. In the year 1937, he once again relocated to Changchun (formerly Hsinking, the capital city of Manchukuo) and there he started a journal called *Manchuroman* and also penned the novel *Shunren*. With this he became the only professional writer in Manchukuo at that time.

"Kuhai" depicts the life story of a white Russian man whose life was deeply affected by the transfer of the Chinese Eastern Railways (also known as Chinese Far East Railways or Manchurian Railways) from Russian to Japanese ownership. Kozlovck was a vintner who took thirty years to make authentic wine. Nonetheless, due to the business slowdown that resulted from the change in ownership of the Chinese Eastern Railways, his friend Ivan, who was an admirer of his wine, was reassigned back to Russia and with this he lost his good friend. Despite this, Kozlovck never compromised on his love for wine. On the other hand, his lost friend Ivan, after wandering in Russia for seven or eight years, finally made his way back to Kozlovck's house. But, Ivan was not in a position to appreciate Kozlovck's wine any more. When the two old friends met, they could do nothing but continue drinking.

When Kitamura wrote "Kuhai" in 1944, it was a period when there were many cultural restrictions that prevented free literary expression. Hence, it was through this short work that Kitamura expressed his discontent. In other words, he condemned the period when, despite having interest in literary activities, people were not allowed the scope to do so. This resentment was the factor that brought his work so many sympathizers in the Chinese literary world.

Kitamura, who wrote mostly from the perspective of a spectator to that date, broke away from his former writing style and dexterously fused his presence as a writer with the character of his protagonist in this small work. This helped him to express the mental state of the white Russian in the most vivid manner possible. Especially, as his focus was on the psychological state of the characters, hence his critical observations and insights into human nature are the key features of this work.

**Key words:** Kitamura Kenjirō, Manchukuo, Manchurian literature, colonial literature, "Kuhai," White Russian, Chinese Eastern Railway, reassignment of Chinese Eastern Railway, cultural restrictions, wine